

社会認識を高める授業の創造

～社会的事象から見いだした「かかわり」を表現する活動を通して～

中田 敦 小林淳真 奥田陽介

1 主題設定の理由

(1) 本校生徒の実態から

本校生徒の社会科における学習到達状況は、過去数年のC R Tの結果から「社会科的な思考・判断」「資料活用の技能・表現」の数値が、「知識・理解」とくらべて、若干低い傾向にある。ここ数年「思考・判断」「技能・表現」の数値が低かった要因として、ある特定の事象しか説明することが出来ない固定的な知識となっていたためと考えている。

授業において私たち教師は、生徒に単に固定的な知識を詰め込むのではなく、「生きて働く知識」（学習や日常生活で出会う問題に生かすことができ、他の事象や事例に応用・転移できる知識～事象間の関連を自ら見出し、そこから社会を見つめなおすことが可能な知識～）へと高めていくことが大切である。

そこで、前研究においては、『かかわり』を意識させる授業の実践に取り組んできた。その結果、「思考・判断」の力は高まってきたと感じている。しかし生徒は「生きて働く知識」を習得できるようにはなってきたものの、それを他者に表現することを苦手とする生徒がまだまだ多いのが現状である。本研究では、昨年度まで取り組んだ、社会的事象から見いだした『かかわり』を他者に伝える学習活動を授業に積極的に取り入れていきたい。「技能・表現」の力を高めると共に「思考・判断」についても、さらなる向上を図っていくことを目指したいと考える。

(2) 本校社会科が考える「社会科の課題」

これまでの本校社会科の研究、また本校生徒の実態から、社会科の教育を改善していくために必要なことは、以下の二つであると考えます。

一つは、生徒が地理認識、歴史認識や政治経済認識（以下、社会認識）について、現代社会を理解する上で有意義なものにすることである。言いかえると、生徒自身が既に持っている知識に、新たなものを加えたり、また組み替えたりして、社会認識を育て、高めていくことである。

もう一つは、社会認識を高めるために、生徒が主体的に学習していける方法を工夫することである。つまり、社会的事象の見方・考え方といった「社会を見る眼」を育み、それを将来に渡って高めていけるように、生徒自身が主体的に考え、自分なりに納得できる学習を可能にすることである。

(3) 昨年度の成果と課題

昨年度は、これまでの「かかわり」を意識する、また見いだすことを主眼に置いた研究内容の継続を基本に、「かかわり」を表現する活動から、さらに思考力・判断力の向上を図ってきた。

各実践から、本校の多くの生徒は「テーマを設定して調べてまとめる」学習に対しては、実に意欲的に、詳細にわたって分析することができているということがあらためて分かった。ただ、調べた事柄について他者に表現する活動となると、個人差もでてくるのが現状である。当然ながら発表の得意な生徒もいれば、作業が得意な生徒もいる。

今年度は、このような状況もふまえて社会科で身につけたい「表現力を具体化」していくことが必要である。グラフや地図などの作成も一つの表現であるし、討論・ディベートも表現である。先にも述べたように、生徒によって表現方法において得意不得意がある。そのことも考慮し、生徒同士が表現活動を通してお互いの社会認識を高めていくにはどうしたらよいか。またどの単元、または場面で用いるのか、見取りはどうするのか、などの課題がある。

単に「発表する力を身につける」ということに留まらずに、「社会科で身につけるべき表現力は何なのか」を追究していこうと思う。まずは目の前の生徒の実態を把握し、生徒に身につけさせたい学ぶ力を養うために表現活動をどう位置づけていくべきか、昨年度の課題を今年度追究していきたいと思う。

(4) 全体研究とのかかわり

①「かかわり」を見いだす課題・活動の設定について

今年度の本校全体研究でも、7年間研究してきた「かかわり」を生かした授業に取り組んでいきたいと考えている。

この『かかわり』とは、「学習内容の関連性」のことを指している。具体的には次の3つを考えている。

- | |
|-------------------|
| ①教科の学習内容同士のかかわり |
| ②教材の持つ学問の体系的なかかわり |
| ③教材と日常事象とのかかわり |

社会科は、まさに「かかわり」を考える教科である。中学校社会科では1, 2年生で地理・歴史的分をを並行して学習したのちに、3年生で公民的分野を学習する。このねらいは、各分野間の学習内容の関連性から課題を見いだし、3年次の公民的分野につなげて、3年間を通して公民的資質を高めていくことにある。π型と呼ばれるこの3年間の学習過程そのものが、「かかわり」を追究する要素を持って構成されていると言っても良い。

また各単元において学習する社会的事象は、その社会的事象だけで成り立っていることなどあり得ない。ある事象には、それが成り立つ原因があり、またそれがもたらす影響や結果がある。他のさまざまな事象がいくつも関連し合って、一つの社会的事象は存在しているのである。したがって学習する上で、一つの事象を理解するためには、必ずいくつかの事象も関連づけて理解していく必要があるし、そうでなければ本当の意味で理解したとは言えないだろう。

前頁の(3)にも示したように、このような「社会的事象間から見えてくること」を、本校社会科では『関連性』と定義している。

さらに、この『関連性』から、「現代の社会を読み解き、自分たちの社会を見つめ直す、課題を見いだす、今後を予測するなど」の「関連性から多様な判断を吟味・検討すること」を、社会科で習得させたい『かかわり』と定義した。

本年度本校社会科は、全体研究のテーマ「知の再構成を目指して―「かかわり」を生かした学習過程の工夫―」を基本として、「かかわり」を生かした授業を工夫、実践していくことを目指すこととした。

社会科の学習における「かかわり」については、社会科総論4ページ目の『☆各分野における「学ぶ力」』に(斜線・太字)で示したが、新しい学習指導要領への対応もかねて、「学ぶ力」及び「かかわり」をベースとして社会認識を高める授業の工夫と実践に取り組みたい。

②学んだことを伝える活動について

社会科の授業では、単純な知識等を問う発問に対しての発言は比較的あるものの、自分の考えを問われる発問や討論する場面になると消極的になる傾向にある。この原因として、自己の学習内容の理解に対する自信の無さ、また意見を主張することに対する遠慮が考えられる。これらを克服し、表現する力を身につけていくには、ある程度繰り返して「伝える活動」を授業で取り組んでいく必要がある。

伝える活動を通して生徒は、他者に正確に伝えるためには、伝え方に工夫が必要であることや、より確かな理解が必要となることを考えるであろう。また伝えることを通して相手が伝える内容を聴き取る活動も見直していくことも必要になるであろう。さらに教師には、そういったことに気づかせる指導や助言が求められる。

他者に伝える活動に取り組んでいくことは、表現する力だけでなく、同時に思考・判断する力を使う必要に迫られるし、他者の発言を聴くことは自己の理解の深まりにもつながるのである。これは(2)の社会科の本来の課題の「社会認識を育て、高める」ことにつながる、社会科にとっても有効な活動であると考えられる。

(5) 学びを見取る評価について

上記①・②に取り組んでいく上で、生徒の学びの変容を見取るとは大変重要である。生徒が社会的事象の「かかわり」を見いだすことができたかどうか、「かかわり」を表現する活動が学習としてなりたったかどうか。それらを教師は、しっかりと見取り授業に生かしていくことが必要であろう。

今年度は、①・②を取り入れた授業の工夫と実践を研究の中心に据えたが、各授業における評価の方法もワークシートや評価表等を工夫していきたいと考える。

(6)「かかわり」を表現する活動について

新しい学習指導要領には、「社会科各分野の共通の目標を目指し、社会的な見方や考え方を養うことをより一層重視する観点に立って、社会的事象の意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明するなどの、言語活動を一層充実する」(「中学校学習指導要領解説 社会編～文部科学省～」改訂の趣旨 p 8より)と記されており、言語活動の充実は今回の改訂の主要事項となっている。

本校社会科で取り組む「表現する活動」は、この言語活動に他ならない。社会的事象から見いだした「かかわり」を表現する活動は、新学習指導要領の趣旨を生かすことにつながるものと考えられる。

さらに「(1) 生徒の実態から」で述べたように、本校生徒の「表現することを苦手とする生徒が多い」という課題を考えた上でも、取り組むべき活動であると考えた。

社会科の表現活動として、次のような活動を考えている。

- ①個人… 地図、レポート、新聞等の作成
- ②小グループ… KJ法など取り入れたワークショップやミニ討論
- ③学級… パネルディスカッション、ディベートなどの討論

学習の形態によって、このように分けてみたが、単元の特徴や目標また生徒の実態によって、さまざまな表現活動が考えられるし、①～③を組み合わせた学習もあるだろう。今年度は、各分野の各単元で、どのような表現活動が有効であるか、まず授業で実践して検証していきたい。

2 研究目標

- (1) 社会認識を高めていくための「知」を「かかわり」でつなげた授業の実践
- (2) 表現活動を取り入れた授業と見取りの工夫

3 研究内容と計画

(1) 研究内容

- ①「学ぶ力」の育成
 - ア 新学習指導要領に対応した「学ぶ力」の内容の具体化
 - イ 表現活動を通しての「学ぶ力」の育成
- ②『かかわり』を意識した授業構成
 - ア『かかわり』の内容の明確化
 - イ『かかわり』から見いだした内容を表現する方法の検討
- ③ 上記内容を踏まえた授業実践とそのフィードバック
 - ア「学ぶ力」を身につけるための授業の工夫
 - イ『かかわり』を見いだすための授業の工夫
 - ウ ア・イをもとにした授業実践(フィードバック)

(2) 研究計画

- ◎ 1年次
 - ①「学ぶ力」を身につけ、『かかわり』を表現する授業の工夫と授業実践
 - ② 各分野における「学ぶ力」と『かかわり』の関係構造の明確化
- ◎ 2年次
 - ①「学ぶ力」を身につけ、『かかわり』を表現する授業の工夫と授業実践
 - ②「学ぶ力」『かかわり』の関係構造をふまえた年間指導計画の検討
 - ③ 表現活動を取り入れた授業における評価規準の検討。

◎ 3年次

- ① 1, 2年次の実践を踏まえた、「学ぶ力」『かかわり』の内容・関係構造の検討
- ② ①を踏まえた、年間指導計画の作成
- ③ 「学ぶ力」を身につけ、『かかわり』を表現する授業の工夫と授業実践
- ④ 表現活動を評価するための規準の作成。

4 本年次の研究内容

(1) 表現活動を取り入れた授業の工夫と実践

本校社会科では各分野における「学ぶ力」の内容・関係構造について、系統立てたものを作成してきた。昨年度は、前研究の【「学ぶ力」の具体化】と【『かかわり』の明確化】を通して、社会科授業のあり方についての検討を重ね、社会的事象から見出した「かかわり」を表現する活動を通して、思考力・判断力をさらに向上させる授業の創造に取り組んできた。

今年度の研究は、昨年度までの研究の継続を基本とし、生徒が社会事象間から見いだした『かかわり』を他者に伝える活動等を通して、社会認識をより高められる授業を工夫・実践していきたい。

さらにそのために有効と思われる「社会科としての表現活動」を、授業に多く取り入れていく中で、その有効性について検証して、表現活動のバリエーションを増やしていこうと思う。

(2) 表現活動を取り入れた授業の年間指導計画と評価規準の検討

新学習指導要領への移行にあたって、各分野ごとに表現活動を盛り込んだ年間指導計画、評価規準の検討及び作成にも取り組んでいきたい。

また、表現活動を取り入れた授業によって、生徒がどう変容し、授業がどう変わったかが明確になるような評価（見とり）を行っていかねばならないと考えている。

☆各分野における「学ぶ力」《※下線部（斜字・太字）は、本校の社会科で目指す『かかわり』の内容。》
〔地理的分野〕

○事象を空間的視点によってとらえるための「学ぶ力」

ア 事象を位置・分布という視点からとらえることができる。

イ 事象を空間的な広がりという視点からとらえることができる。

ウ 一定の事象によって地域を区分することができる。

○さまざまな事象を結びつけて、各地域の社会の営みを読み解くための「学ぶ力」

エ 各地域の自然事象を結びつけることによって、人々の行為の前提となっている条件を見定めることができる。

オ 各地域の政治・経済・社会事象を結びつけることによって、人々の行為の社会的要因を見定めることができる。

カ 地域内や他地域との機能的関係をつかむことによって、人々の行為にとっての空間を見定めることができる。

キ 一定の空間における自然的前提条件や社会的要因のもとで、人々の行為による各地域の社会の構成を読み解くことができる。

○他地域との対比や関連において、自分たちの社会を見つめなおすための「学ぶ力」

ク さまざまな視点から他地域の社会と自分たちの社会とを対比することができる。

ケ さまざまな視点から他地域の社会と自分たちの社会とを関連づけることができる。

コ 自分たちの社会を空間的關係において見つめなおすことができる。

〔歴史的分野〕

○事象を時間的視点によってとらえるための「学ぶ力」

ア 事象を時期という視点からとらえることができる。

イ 事象を時間的なつながりという視点からとらえることができる。

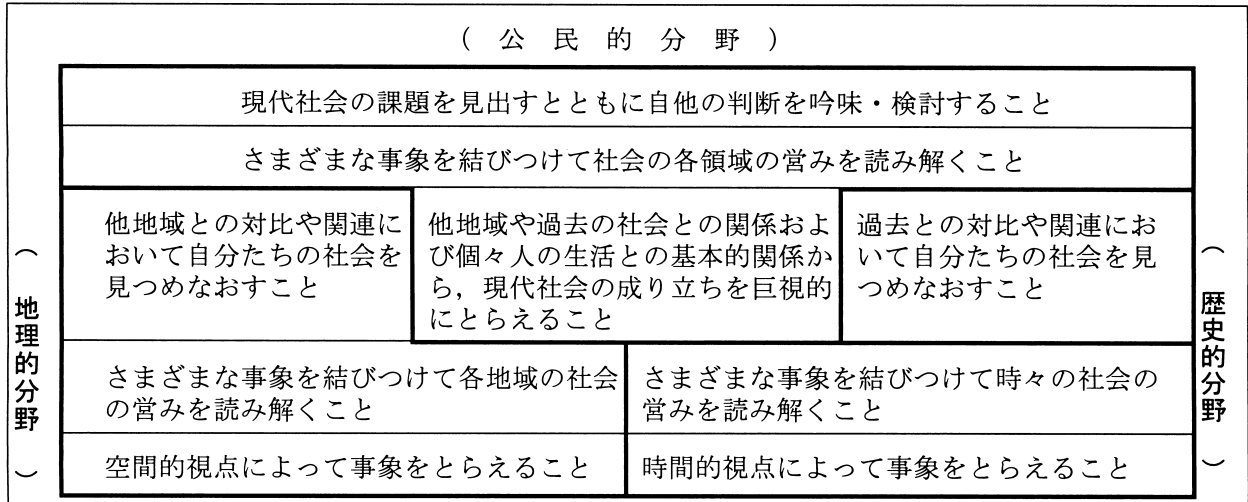
ウ 一定の事象によって時代を区分することができる。

- さまざまな事象を結びつけて、時々の社会の営みを読み解くための「学ぶ力」
- エ 時々の人々の行為の歴史的背景を知ることができる。
- オ 時々の政治・経済・社会事象を結びつけて、人々の行為の社会的要因を理解することができる。
- カ 時々の社会の動向を、人々の行為と結びつけて把握することができる。
- キ 一定の歴史的背景や社会的要因のもとで、人々の行為による時々の社会の構成を読み解くことができる。
- 過去との対比や関連において、自分たちの社会を見つめなおすための「学ぶ力」
- ク さまざまな視点から、過去の社会と自分たちの社会とを対比することができる。
- ケ さまざまな視点から、過去の社会と自分たちの社会とを関連づけることができる。
- コ 自分たちの社会を時間的關係において見つめなおすことができる。

〔公民的分野〕

- 他地域や過去の社会との関係、および個々人の生活との基本的関係から、現代社会の成り立ちを巨視的にとらえるための「学ぶ力」
- ア 現代日本社会を地理的世界のなかに位置づけてとらえることができる。
- イ 現代日本社会を歴史的世界のなかに位置づけてとらえることができる。
- ウ 人々の生活を社会との相互的な関係のなかに位置づけてとらえることができる。
- さまざまな事象を結びつけて、社会の各領域の営みを読み解くための「学ぶ力」
- エ 経済事象を結びつけて現代社会の仕組みを見定めることができる。
- オ 政治事象を結びつけて現代社会の仕組みを見定めることができる。
- カ さまざまな経済事象や政治事象を結びつけて現代社会や社会生活の構成を読み解くことができる。
- 現代社会の課題を見出すとともに、自他の判断を吟味・検討するための「学ぶ力」
- キ 現代社会の今後を予測することができる。
- ク 現代社会の課題を見出すことができる。
- ケ 現代社会の課題をめぐる多様な判断を吟味・検討することができる。

※本校における「学ぶ力」の育成の構造図



5 今年度の成果と課題

今年度も本校社会科では「社会認識を高める」ことを目標に掲げて、授業実践を中心に取り組んできた。授業ではこれまで研究を重ねてきた「かかわり」を、生徒に意識させたり、見出、させたりする場面を設定してきたことで、社会科における「かかわり」についての理解も徐々にではあるが生徒たちに浸透し、思考力・判断力の向上にもつながってきている。

また、昨年度から重視している「表現活動」も思考力・判断力をさらに向上させ、社会認識を高めるために学習活動に取り入れてきた。まず1学年の歴史的分野では年表の作成を行った。基本的に単元のまとめと

して取り入れ、時代を大観すること、歴史の流れを大きく読み取ることを第一に既習事項を整理しなから作成させた。

今回の事後報告会で行った2学年の授業では、第二次世界大戦終了までの日本史を中心とした歴史の流れを読み取り、歴史の転換点で時代を区切る授業を実践した。

いずれの授業でも各自の時代区分の作成で授業を終わらせず、区分した理由や歴史の流れについて、自分なりの解釈を根拠立てて伝え合うことを行った。この活動は、前述した「思考力・判断力も高め、社会認識を高める」ことをねらいとしたものである。伝え合う活動によって、より深い思考を促し、理解もより確かなものになったのではないかと考える。

この学習活動の環題の一つに、時代を区分する際にどういう視点〔主な出来事（政治）・外交・文化など〕で判断させるか。また区切る回数も全員統一するべきかが挙げられた。研究会では、視点は1つに絞った方が、また時代を区切る回数についても統一した方が、論点がかみ合つて話し合いも成立しやすいのご意見をいただいた。この点について検討した結果、生徒一人一人の多様な考えを引き出し、また伝え合う活動において多様な考えについて生徒に吟味・検討させるために、複数の視点をを用い、時代の区分も回数を限定せずに試行してみることにした。社会的事象には意見が一つに定まらず、多様な解釈が存在することが多い。生徒たちにさまざまな考えに触れさせることが、多面的・多角的な思考・判断を育てていくことにつながっていくのではないかと考える。

地理的分野では、まず1学年において身近な地域の調査を「私の町紹介」というテーマで自宅周辺の略地図を作らせ、地域に多く見られるものの分布の様子やその地域を象徴するもの等を書き込んでまとめさせ、自分の住んでいる地域の特色を明らかにさせた。また1、2年生それぞれが、各自が選んだ都道府県・国の調べ学習を行い、学習のまとめとして級友に伝え合う活動を今年度も取り入れた。先に調査学習が終了した2年生から1年生への国調べのプレゼンテーションを行い、調査の様子だけでなく、表現する方法も先輩から後輩へと伝えられた。この学習を経て1年生では全員が、学級を6～7に分けた小グループを巡回して調査内容を紹介する発表会を実施した。社会的事象の視点の関連についての説明が不十分であるなど、生徒によつて調査内容に不備も見られたが、少人数で伝え合う基礎は身につけてきている。

公民的分野では、財政について考え、将来の国家像を描き予算を考えさせる授業に取り組んだ。「政権交代」「事業仕分け」なる言葉をニュース等で頻繁に耳にするなかで行った本単元は、生徒が財政のあり方をより身近に考えていくうえで、よいタイミングとなった。

財政をはじめ、環境問題、少子高齢化、エネルギー問題など現代の日本には課題が山積みである。本単元では、現代の日本に住む一人の国民として、何に目を向けていかなければならないのか、他者は何を見て、何を考えているのか、深く追究する場を設定することにより社会とのかかわりを見いだすことをねらった。その結果、日本の現状を知り、他者の考えを知ることによって、日本の課題を個人レベルで考えることができた。また、その考えをワークシートにまとめ、他者に説明することによって、より深い国家像を描くことができたと考える。

ただ、今後への課題も残った。生徒が自らの変容を見取ることかできるように事前・事後調査を行い、いつ、どのように自分自身の考えが変わったのか気付かせることも大切である。また、生徒の思考を最大限引き出すために、授業に対するモチベーションを上げる工夫も大切である、そして、今回は自分の考えを他者に発表し、聞き手は内容把握に務めていたために、話し合いというものが機能せず、伝え合いになってしまった。知の再構築をはかるには、お互いに主張し合うという意見の交錯が必要であり、その過程を通すことによつて、考えもより発展したものに変わっていくだろうと考える。このようなことを重視し、研究を進めていきたい。

今年度は3分野を通して、表現活動を通して社会認識を高めるだけでなく、その達成度合いの「見取り」も研究の目標とし、計画にも入れたのだから具体的な評価方法等をまとめることができなかつた、生徒の多様な思考や判断がどう向上してきたのか、生徒自身も認知し、また教師も次の授業に生かすためにも3カ年の最終年度に向けて、具体的な評価の方法についてもまとめていきたい。

生徒作品1：1年生歴史的分野（古代後半を年表にまとめる）

「聖徳太子が目指した国づくりはどうだった？」をテーマに飛鳥時代以降の歴史の流れを考えて、自分で考えた根拠をもとに時代を区分させたものである。飛鳥～平安時代（武士の登場前）の単元のみをまとめたとして行った。

歴史年表 古代後期 I 〈飛鳥・奈良・平安前期〉をまとめよう

()組()番 名前()

年	五九三	六〇〇	六〇三	六〇四	六〇七	六四五	六六一	六六二	六六三	七〇一	七〇二	七三三	七三四	八六六	八九四
時代	飛鳥時代						奈良時代				平安時代(前期)				
政治など 聖徳太子が目指した国づくりはどのようにだった？	聖徳太子が推古天皇の御政に賛同し、大化の改新を断行。冠位十二階を制定し、律令政治の基礎を築く。百済からの渡来文化を積極的に取り入れる。						聖徳太子の御政の理想を継ぎ、大化の改新の成果を継承。大和政権の統一を完成させる。大和政権の中心地を大和に定む。				桓武天皇の御政により、奈良時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。桓武天皇の御政により、飛鳥時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。				
外交 外国とのつながり	百済からの渡来文化の受け入れ。唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。						唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。				唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。				
文化 家やくらし	百済からの渡来文化の受け入れ。唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。						唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。				唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。				
名前を付けた理由	聖徳太子時代						改革時代				天皇中心時代				
国づくりが大きく代わるところで区切って、名前をつけよう！	聖徳太子が推古天皇の御政に賛同し、大化の改新を断行。冠位十二階を制定し、律令政治の基礎を築く。百済からの渡来文化を積極的に取り入れる。						聖徳太子の御政の理想を継ぎ、大化の改新の成果を継承。大和政権の統一を完成させる。大和政権の中心地を大和に定む。				桓武天皇の御政により、奈良時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。桓武天皇の御政により、飛鳥時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。				

歴史年表 古代後期 I 〈飛鳥・奈良・平安前期〉をまとめよう

()組()番 名前()

年	593	602	604	645	672	701	710	743	754	764	805	806	901	935	990	1016	1027
時代	飛鳥時代							奈良時代				平安時代(前期)					
政治など 聖徳太子が目指した国づくりはどのようにだった？	聖徳太子が推古天皇の御政に賛同し、大化の改新を断行。冠位十二階を制定し、律令政治の基礎を築く。百済からの渡来文化を積極的に取り入れる。							聖徳太子の御政の理想を継ぎ、大化の改新の成果を継承。大和政権の統一を完成させる。大和政権の中心地を大和に定む。				桓武天皇の御政により、奈良時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。桓武天皇の御政により、飛鳥時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。					
外交 外国とのつながり	百済からの渡来文化の受け入れ。唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。							唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。				唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。					
文化 家やくらし	百済からの渡来文化の受け入れ。唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。							唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。				唐からの文化の受け入れ。新羅からの文化の受け入れ。高麗からの文化の受け入れ。					
名前を付けた理由	聖徳太子時代							改革時代				天皇中心時代					
国づくりが大きく代わるところで区切って、名前をつけよう！	聖徳太子が推古天皇の御政に賛同し、大化の改新を断行。冠位十二階を制定し、律令政治の基礎を築く。百済からの渡来文化を積極的に取り入れる。							聖徳太子の御政の理想を継ぎ、大化の改新の成果を継承。大和政権の統一を完成させる。大和政権の中心地を大和に定む。				桓武天皇の御政により、奈良時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。桓武天皇の御政により、飛鳥時代の政治体制が崩壊。桓武天皇が平城京を遷都し、平安京（今京都）を遷都。					

生徒作品2：2年生的分野（明治時代を年表にまとめる）

「国内の動き」「外国との結びつき」「社会の移り変わり」の3つの視点で年表を整理し、各事象間のかかわりを考えて明治時代の転換点をいくつかに分けさせた。区分線は年表の一番上に記入している。

No. 1

年号	①	②	③	④
一八六七	大政奉還 → 藩が幕府から朝廷へ → 藩政復古の大号令 → 官制の制定 → 官制の制定			
一八六八	五箇条の御誓文 → 軍機密の制定 → 軍機密の制定 → 軍機密の制定			
一八六九	版籍奉還 → 中央集権国家の確立 → 中央集権国家の確立			
一八七〇	廃藩置県 → 府県制の導入 → 府県制の導入			
一八七二	学制の公布 → 岩倉使節団の派遣 → 岩倉使節団の派遣 → 岩倉使節団の派遣			
一八七三	徴兵令 → 徴兵に反対する者が出る → 徴兵に反対する者が出る			
一八七四	地租改正条例の公布 → 地租改正条例の公布 → 地租改正条例の公布			
一八七五	台湾に出兵 → 台湾に出兵 → 台湾に出兵			
一八七六	日朝修好条規 → 日朝修好条規 → 日朝修好条規			

No. 2

年号	③	④	⑤	⑥
一八七七	西南戦争 → 西南戦争 → 西南戦争			
一八七九	琉球処分 → 琉球処分 → 琉球処分			
一八八〇	国会期成同盟の結成 → 国会期成同盟の結成 → 国会期成同盟の結成			
一八八二	自由党の結成 → 自由党の結成 → 自由党の結成			
一八八四	立憲改進黨の結成 → 立憲改進黨の結成 → 立憲改進黨の結成			
一八八五	秩父事件 → 秩父事件 → 秩父事件			
一八八六	内閣制度の創設 → 内閣制度の創設 → 内閣制度の創設			
一八八九	大日本帝国憲法の公布 → 大日本帝国憲法の公布 → 大日本帝国憲法の公布			
一八九〇	教育勅語の公布 → 教育勅語の公布 → 教育勅語の公布			
一八九一	田中正造が国会で足尾銅山の鉄毒問題を取り上げる → 田中正造が国会で足尾銅山の鉄毒問題を取り上げる → 田中正造が国会で足尾銅山の鉄毒問題を取り上げる			

現代の諸問題を考え、下記のように優先順位をつけて生徒一人一人が予算案を作成し、小グループ (生活班) 内で提案した。お互いの考えを聞く中で自分の考えを再考し、より確かな将来の国家像づくりにつなげた。

東大附属中 公民

国家予算をたてようVI (まとめ)

○優先順位

社会保障関係費
公共事業関係費
地方交付税交付金
防衛費
文教および科学振興費
公債費
その他

○左記の考えに至った根拠

財政というのは当然のことながら国のためのものである。常に時代に対応する予算を考えたとき、現在は景気の回復に優先して取り組まなければならない。そのためには私達の生活を良くするため、社会保障関係費にたいして雇用を増やすため、公共事業関係費やグレート出身の地事などお話しづく地方を更に活性化させ国を充実させるべきである。その上でアジア諸国、軍事強化から守る国外に費やす防衛費が必要である。公債費は「後払い」になるというが無理な理由にお互いを得るという「国民のための財政」を実施すべきだと思う。

○他者の考えを聞いて、気付いたことや考えの変化をかこう。

社会保障関係費が上位に集まっていることから「国民のための財政」として、まず私達の生活から良いことが大切であると考えることに気がついた。

○あなたが考えた予算編成だと、日本はどのような国になると思いますか。

国が国民を最優先した財政を編成することで、つなかりが密接になり、世論が良くなり支持率が上昇したりと国民の関心が高まり投票率が上昇する。本当に国民が必要とする政策が遂げられる好循環が生まれる。

(1) 組氏名 _____

東大附属中 公民

国家予算をたてようVI (まとめ)

○優先順位

公共事業関係費
社会保障関係費
国債費
地方交付税交付金など
文教および科学振興費
防衛関係費
その他

○左記の考えに至った根拠

今の日本に最も必要なのは不況対策だ、ということに念頭に予算をたてた。仕事を増やせば失業者は減るので何より公共事業費を1位に、環境対策の公共事業を行う。そして国民の生活に深く関わる社会保障費を2位にし、介護施設での雇用拡大も目指す。地道に返っていく国債費は3位。地方交付税交付金を4番目にしたのは、増やせば国に地方が頼り、減らせば地方が財政難になるから。地方での公共事業費の拡大も図る。文教および科学振興費は現状維持で科学技術の発展を目指す。防衛費も現状で自衛隊は十分機能しているため6位。その他は一番下で大丈夫。

○他者の考えを聞いて、気付いたことや考えの変化をかこう。

地方交付税交付金はそんなに減らすと地方が活気づかないことに気付かされた。その地方交付税交付金は5位から4位に上げた。

○あなたが考えた予算編成だと、日本はどのような国になると思いますか。

不況を脱し、好景気の国になる。また、環境対策の整備も進み工口な国に、福祉施設も充実しお年寄りの方も安心して過ごせる国になっていくと思

(1) 組氏名 _____